



親父の財布

著・ひろあ

著作権はひろあにあります。

親父の財布

～僕が競馬ブログを続ける理由～

2011年10月親父が死んだ。

本当に、急だった。

2008年10月に親父のがんが見つかった。

その時の手術は成功した。

その後の治療の経過もよく、親父が死んだ日に、がんが見つからなければ、寿命まで生きられるはずだった。

2008年、親父のがんが見つかったとき、ステージ3かステージ4と言われた。

手術の時、僕たち家族には、

希望は、持たないでほしいと病院の先生が言った。

でも、親父の手術はうまくいき、転移もなかった。

ちょっとした奇跡だねと言われた。

流石は親父、と思った。

もう、死なないだろうと、勝手に思っていた。

あのがんの手術の日から3年。

その日は、下剤を飲んで、腸の中をからっぽにして、

がんの手術をして3年目の検査をするだけだった。

それで、異常なしって言ってもらって、あとは寿命を全うするだけだった。

それだけだった。

その下剤がよくなかったのか、渡された薬が間違っていたのか、

下剤を飲んだ後、親父は倒れ、救急車を呼んだけれど、亡くなった。

信じられなかった。

よくわからなかった。

助かるか助からないかわからないといわれたがんの手術で生き残った親父が、

下剤を飲んだだけで死んだ。

親父の弟、つまり、おじさんは、病院を訴えろと言った。

僕もそれは考えた。

いろいろ医療過誤のことも調べた。

病院のミスでも、解剖に回せば、心筋梗塞で処理される。

そんな記事も読んだ。

病院も、解剖する側もグルで、病院側が悪くないようにするだけだって、記事だった。

案の定、心筋梗塞で処理され、その検案書はもらえなかった。

ネットに医療過誤事件の詳細が載っていたけれど、

そのまま過ぎて驚いた。

だけど、「殺された」という感情は僕にはなかった。

病院を恨む気持ちもあった。

あったけど、助けてくれた、という気持ちのがほうが大きかった。

助かるか助からないかわからない親父を、あの手術で助けてくれた。

6時間か、8時間か、昼から始まった手術は、

夜になっていた。

これが親父さんのがんなんだよ、って先生は見せてくれた。

自分で言うのもなんだけど、本当にきれいに取れたんだって。

あの長時間、親父を助けるために、この人たちは頑張ってくれた。

そして、3年間、親父は生きてくれた。

それは事実だった。

おじさんは、怒っていて、葬式の日も、「このままでいいのか」と言って、

葬式が途中止まったけれど、僕の家族は「そのままでいい」と言った。

100%納得したわけじゃない。

納得したわけじゃないけど、親父が返ってくるわけじゃない。

僕たち家族が欲しいのは、お金でもなんでもなく、親父だ。

謝罪も、慰謝料も、そんなものをもらっても、

親父は返らない。

生き返る方法があるならなんだってする。

なんだってするけれど、そんな方法はこの世にはない。

こんな気持ちを自分が経験するなんて、思っていなかった。

そして、

僕が病院を訴えなかったのは、

もうひとつ理由がある。

ただ、僕がそう信じていたってだけなのかもしれないけど。

お葬式でお経をよんでくれたお坊さんが、こう言ってくれた。

僕たちが、どうして親父が死んだのかを詳しく話した後に、

こんな言葉をくれた。

「3年間、生きてくれはったんですねえ。」

とても柔らかな言葉だった。

その言葉を聞くまで、僕の中にあっただのは、

どうして親父が死んだのか？という気持ちだった。

あの時、生かしてくれたのに、神様（がいるのであれば）ってというのは、

本当にいじわるなやつだ、そう思っていた。

そのお坊さんは下剤のことも、全部、知ったうえで、

そう言ってくれた。

「3年間、生きてくれはったんですねえ。」

僕はその言葉を聞いて親父が死んでから初めて泣いた。

親父が死んだその時は、泣き崩れる母と弟を、ただじっと見ていただけだったのに。

意味が分からない理不尽さで、悲しいというよりも、怒っていた。

神様か誰かに。

ここでこんなふうに関父を殺すなら、どうして、3年前助けたんだ！

そんな風に怒っていた。

どうして、僕たち家族をこんな悲しい目にあわせるんだと。

それは間違いだった。

親父は、3年間生きてくれたのだ。

親父ががんになったとき、僕は、フリーターだった。

小説家になるという夢を追って、フリーターをしていた。

親父ががんになって、親父は自分の仕事をやめなくてはいけなくなって、

他の仕事はするけれど、給料は減る。

家に入れるお金をつくるために、

いつ、親父が入院するかわからないから、

僕はフリーターをやめることを決意し、

僕は契約社員になり、そして、正社員への道が開けはじめていた。

親父が死んで1年後、僕は正社員になった。

親父がくれたがんになって助かったあの3年間で、

僕は普通の生活を取り戻した。

今は、大切な人と結婚し、それなりに幸せな日々を過ごしてる。

あの、3年がなければ、

どうなっていたかわからない。

親父は、がんになって、3年、僕のために生きてくれたのかもしれない。

「3年間生きてくれはったんですね。」

あの言葉がなければ、僕は親父が生きてくれた意味を、考えもしなかったと思う。

ただ、親父がいなくなった悲しみを、

ただ、怒っていたと思う。

がんの手術があった日。

あの時、親父の寿命が来ていたのかもしれない。

だけど、3年、生きてくれたのだ。

そう思ってから、

僕は、病院を恨む気持ちはほとんどなくなった。

葬式が終わってしばらくして、

母が親父の財布をあけようといった。

親父の財布を勝手に開ける。

その行為は、僕たちの中で、本当に親父が死んだのだということを確認する行為だった。

火葬した後でも、それでも、思ってしまう。

もしかしたら、今日、親父は帰ってきてくれるかもしれない。

だから、親父の財布はあけたくなかった。

でも、母があけるといったので、みんなであけた。

そしたら、

10万円以上の現金が入っていた。

僕も、母も、弟も驚いた。

親父のお小遣いは、そんなに多くなかった。

会社をやめてから、契約で働いていたところの給料では、

そんなにお小遣いをもらっていなかったはずだ。

お昼ご飯などのお金をのぞけば、月に使えるのは5000円、6000円くらいだったはずだった。

「親父、馬券で増やしてたんやなあ」

弟が言った。

がんになって、会社をやめて、毎日面白くないと言っていた親父は、

3年間、毎週、競馬場に行っていた。

思い返すと、不思議だったけれど、

車がパンクしたり、

家の改修でまとまったお金があるとき、

親父がポンとお金を出した。

「実は今日、たまたま万馬券当てたんや」って。

もう、確かめることはできないけど、

もしかしたら、今までの馬券で儲けていたお金を出してくれていたのかもしれない。

おそらく、そうなのだと思う。

親父は、どうやって、馬券で勝っていたんだろう。

もう、知ることはできない。

だけど、親父は馬券上手かったんやなあ。

ということはわかった。

頭のいい人だった。

とても優しい人だった。

親父が生きていたとき、僕は親父に腹を立てることがよくあった。

トイレが重なったり、

洗面所が重なったり、

仕事が大変で、いらいらしていることも多く、

その態度を親父の前であからさまに出したこともあった。

でも、親父はなんにも言わなかった。

今だからわかる。

幸せだったのだ。

だから、そんな些細なことでいらいらできたんだ。

結局、親父に何も返せなかった。

3人で親父の財布を見ながら、黙っていた。

少しして、弟が言った。

「普通の顔して、馬券当たったこと、俺らに黙ってたんやなあ。子供みたいや。」

弟の一言で、3人で笑った。

親父は死んだってことを、確認した後だったけど、

親父の子供っぽいというか、僕たちの知らなかった、そういうところがわかって、

はじめて、親父が死んでから、心から笑えた。

その頃から、僕は知りたくなった。

親父はどうやって、馬券がうまくなったんだろう。

どうやったら、親父のようにうまくなれるんだろうって、思うようになった。

僕が実家に帰って、家族4人の話になったとき、

まだ、親父が生きていたころの話をするとき、

いつも競馬の話になる。

母が万馬券を当てて、旅行に行くことになった。

その旅行先で、残りのお金で、天皇賞（春）を勝負していいことになった。

マイネルキッツが勝った天皇賞（春）。

家族4人ではずした。

タムロチェリーが勝った阪神ジュベナイルフィリーズで、僕は馬券を買い間違えていたのに、親父は、当たったねと言って、当たった金額をくれてたっという話を後から聞いたり。

親父と、弟と、僕で、ヒルノダムールが勝った天皇賞（春）を見に行って、

ひそかに親父が別のレースを当てていたり。

弟が、ヒルノダムールだけ買ってなくて、2万円すったり。

僕たち家族の話の中には、いつも競馬があった。

いつも、ちょっと当たったり、ちょっと負けたり、

競馬のせいで家族が崩壊したとか、

競馬のおかげで家が建ったとか、

そんな派手なことは一切なかったけれど、

お互い喧嘩しても、何かあっても、

週末になれば、武豊だ、蛸名だ、ダイスポの山河の予想だ、と話していた。

僕たち家族の隣には競馬があって、

何か困ったことがあっても、競馬のおかげで、結局、楽しくやれていた。

親父の財布にあった競馬で儲けた10万円が、

残された僕たちを明るくしてくれた。

競馬から離れたりする時期もあったけれど、

また、帰ってきてしまう。

ただ、隣に有り続けてくれる競馬。

結局、僕はもう競馬が好きなんだと思う。

いい言葉が見つからないけれど、

そういうことなんだと思う。

2013年、日本ダービーで、武豊騎手がキズナで G1 を勝った。

あの武豊騎手が、

落馬で長期休養しなければならなかったり、

外国人騎手に馬を奪われたり、

100勝もできなったり、

それでも、彼は、彼らしい騎乗で返ってきた。

陽はまたのぼる。

2013年は、柴田騎手もマイネルホウオウで G1 を勝ちました。

3年間0勝だった騎手が、

G1 ジョッキーになったんです。

悲しいことがあっても、

つらいことがあっても、

まだ生きている僕たちは、

生きるってことをやめちゃいけないから。

親父がなくなって、けっこう僕の家族にもいろいろまだまだひと波乱、ふた波乱あったん

だけど、それでも、あれだけ、もうだめだと言われた騎手たちが、

また、立ち上がって、素晴らしいレースを見せてくれているのを見て、

頑張らないとって、

せっかくの生きるってことを楽しまないとって、

僕はそう思えるようになったんです。

競馬があったから。

僕だって人間だから、競馬への熱が冷めたこともたくさんあったけれど、

やっぱり、好きだから。

このブログは続けようって。

競馬が好きな人がひとりでも増えてくれたら嬉しいし、

一度、競馬を離れてしまった人が、

あ、まだ、「競馬大百科事典」更新されてるやんって言って、

競馬に戻ってきてくれたら、それもすごく嬉しいし、

ひろあもなんかよくわからないけれど、

競馬ブログ頑張ってるし、

俺も頑張るか！！なんて思ってくれる人が出てくるようになったら、

それってすごく最高だし。

だから、僕はこの競馬ブログを続けます。

これを読んでくれた人が、

ずっと競馬を好きでいられるように、僕はたんとんと僕らしく、

競馬の世界のことを記事にするから。

ついてきて、なんて、おこがましいことは言わないけれど、

隣にいるんだあ、くらいの意識で、僕のこのブログのことを思ってくれると嬉しいです。

なんか、恥ずかしいこと書いてますけどね。

僕は競馬が好きだから。

ずっとこの競馬ブログを続けていきます。

だから、気が向いたときに、

あ、ひろあはどうしてるんだろうって思ったら、

僕のブログをのぞいてください。

親父のように馬券が上手になりたいって、

試行錯誤している僕がそこにいると思います。

2015年10月10日

ひろあ

競馬大百科事典

競馬大百科事典公式無料メルマガ

最後まで読んでいただき、本当に本当にありがとうございました。

べったりじゃなくていいんで、あなたとの良き出会いが、続いていきますように。